

お笑いの形

東京外国語大学大学院総合国際学研究所言語文化専攻

ニューベリーペイトン ローレンス

嫌なことしかニュースにならないというが、2020年度は国内外を問わず、新型コロナウイルスの蔓延を始めとして鬱陶しいニュースばかりだった。2016年にはたまたま国宝とされていた有名人が何人も亡くなったことで、イギリスでは冗談半分で「史上最悪の1年」と呼ばれたりした。今振り返ると、よくその程度のことで騒いでいたなとつくづく考える。2021年3月現在、イギリスだけでも12万人以上がコロナで亡くなっている。また、欧州連合からの離脱によりイギリスの経済が甚大な打撃を受けている。そのような状況の中で、あえて楽しい(軽い?)ネタについて書いてみたい。研究分野でもなんでもないが、一人の留学生として感じた、日本のお笑いの特徴について述べる。

日本のお笑いはいくつかの点で欧米のコメディの主流と大きく違うように思う。1つ目の違いは「意外性」の役割だ。欧米のコメディでは原則として、予想外の展開を見せることで観客を笑わせる。同じギャグを繰り返すと必然的に意外性がなくなるから、どんどん話題を変えて次から次へと新しい冗談を言い続ける。日本のお笑いではむしろ反復が期待される側面がある。だからこそ、お笑い芸人が特定の言葉や動作と連想されるし、「あの有名なネタを久しぶりに見られてよかった」や「あのコントを生で見られてうれしい」といったコメントが成り立つ。

日本のお笑いは1つのネタの中でも、反復がよく使われる。私は今になっても、特に漫才では内容をもれなく聞き取れることが少ない。しかし、前半のせりふが後半に再び出るときや、その芸人特有のキャッチフレーズがあると、楽しく聞くことができる。サビだけよく知っていてつい口ずさむ歌のようだ。ただ、最初から半分ネタばらしなので意外な展開にげらげら笑うことはなかなかない。

お笑いとお笑いの形態も違う。というのは、欧米ではコメディアンが一人でステージに立って観客に語りかけるのが一般的だが、お笑いでは多くの場合、2人で進行する。しかも、漫才では「ボケ」と「ツッコミ」という役割分担がほとんど鉄則になっている。私の素人目では、「ツッコミ」の役割は多くの場合、「面白いところ」を観客に知らせる、あるいは「笑ってね」という合図をする、ガイドのような存在に見える。これもまた親切だが、「面白いところへの気づきこそが楽しい」という欧米の考え方からすると少し残念とも思える。コメディアンはどちらかというときりげなくボケて、それを観客に気付かせる。そのせいなのかエネルギーギッシュな漫才に比べゆっくりした流れが一般的だ。

ここまでの話では、日本のお笑いを批判していると思われるかもしれない。そうではなく、人類共通の「笑う」という現象が国や文化によってこんなに違うんだということ自体が面白いのだ。それと同時に、もちろん共通点もあり「ピコ太郎」の海外進出からわかるように、日本のお笑いは海外でも受ける。お笑いコンビの「サンドウィッチマン」も、近年はスペインでも講演している。今後、国内外のお笑いの合流によって新型お笑いのさらなる発展を期待している。

次に、言語を研究している者として、日本語の特徴から生まれるお笑いの可能性について触れておきたい。日本語はいわゆるSOV(主語-目的語-動詞)型言語で、動詞が文の最後にくるとされている。動詞が文の中心的な意味を表すことが多いので、最後まで聞かないと文の意味が確定しない。動詞でさえ、「行きまー」と言って聞き手を待たせることが簡単だ。もちろん、それまでの内容からたいてい予想でき

るが、文末は聞き手の予想を覆す最適のチャンスを与える。これは、英日や日英の同時通訳における難点でもあるが、お笑いの武器にもなれる。実際、「パンクブーブー」の2人のように、日本語の構造を活かして観客の予想を裏切る漫才もある。ここでは意外性が十分に生まれ、個人的にはとても面白い漫才ができあがる。

最後に、お笑いのネタにしてもよさそうな日本の日常的なエピソードを2点紹介したい。留学生であれば、どちらか疑問に思ったことはあるのではないだろうか。

1. 天気予報：天気予報士が気温、気圧、湿度、紫外線、花粉などについてまくしたて、となりに立たされている女子アナウンサーはやがて堪忍袋が切れて「そうなんですね、では、明日の天気はどうでしょうか」と突っ込む。
2. 商店街で外国人を取材：和食を試食した外国人が生半可なコメントをしても、日本語の吹き替え（なぜかアニメのような音質）では絶賛の声が後を絶たない。納豆を試食した1人が微妙な表情を浮かべるが、すぐにテロップで顔を隠される。

以上のエピソードを読者が面白いと感じるかどうかはわからないが、暗い世界情勢からちょっとした面白さを見つけ出す喜びを日々感じるようにしたい。